



優秀賞

あの日魅た、黄色と黒に同化して

せりざわ かずや
 芹澤 和也 【加和太建設株式会社】

「君たちが飛び込む世界は“3K+S”だ。これまで言われてきた“きつい”“汚い”“危険”に、これからは“仕事がない”が加えられるだろう。」

そう教授に言われたのは今から十数年前、私が大学生の時である。

その20年程前、幼い私は母にねだり工事現場を幾度となく遠くから眺めに出掛けた。

物心つく前に車や新幹線、飛行機が好きな男の子がいるように、私は工事が好きだった。理由は分からないが特にあの、黄色と黒の工事色に胸を躍らせた。

その工事色のネットフェンスにへばり付いて離れない私を見る、少し困った母の顔を今でも覚えている。きっとその時から感じていたのだ。

“ものづくり”

それは機械を使った精密なものではなく、そこに住む人々の暮らしや、街そのものをつくるというスケールの大きさに魅了されていたのだろう。

大人になった私は、今はその黄色と黒のフェンスの中にいる。現場施工管理、あの時遠くから眺めたカッコいい背中だ。

3Kと言われる理由は確かに分かる。地域で災害が発生すれば、家に家族を残し昼夜問わずパトロールや復旧工事に行く。確かに危険できついかもかもしれない。命を落とす可能性だってゼロではない。なぜそこまでできるのか。正直自分でも分からない。しかしただ一つ言える事は、“地域を守る事”それが家族に誇れる事であるという事だ。志の高い仲間とはこんな話をする。「宝くじ10億円当たってもこの仕事はやめない。」賃金はもちろん大切であるが、もっと大事な事がある。ただごはんを食べていくために道路や川をつくっているのではなく、生活を、街をひいては元気をつくる事にやりがいを感じ楽しんでいるのだ。

教授の言う仕事量をみると、新設工事は確かに減っているかもしれないが、老朽化に伴う補修工事や維持工事、災害復旧工事を考えれば、土木の仕事がなくなる事は絶対ない。

しかしながら昨今では技術者不足が嘆かれている。ICT技術の導入による省人化や、女性技術者の活躍による人員の確保により、土木のイメージは変化しつつある。

それに加えもっと必要な事は、将来を担う子供たちに土木の格好良さを伝える事ではないだろうか。

私たちの会社で取り組んだ「けんせつ体験まつり」もその一つだ。地域の子供たち向けに開催したこのイベントは、測量やドローン操縦、重機搭乗等を体験するコンテンツを設け、建設業の魅力を子供たちのみならず、その親である大人に対しても発信した。小さな町で2,500人を集めたこのイベントは、旧3Kのイメージを払拭し、子供たちに建設業は楽しいと意識付けるものとなった。

このように少しずつでも伝えていくべきではないか。人々の暮らしに必要な不可欠な道路や川をつくる感動、災害復旧で地元住民に感謝される事、なによりシビルエンジニアと呼ばれ工事を完成させる達成感、わが国で多くの子供たちが憧れる、プロ野球選手としてホームランを打つ事やプロサッカー選手としてゴールを決める事に負けずとも劣らない。それはその背中に憧れた私が証明である。

あの頃の私のようにきっと今もどこかの子供が私たちの背中に憧れている事だろう。

子供たちが憧れてやまない背中を、私たちが黄色と黒の中から発信しよう。

“新3K+S”

“感謝”“感動”“カッコイイ”そして“刺激的な毎日”を。

